
麒麟の憂鬱

cokoly

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キリンの憂鬱

【Nコード】

N0651D

【作者名】

cokoly

【あらすじ】

ある朝起きたら僕はキリンになっていた。混乱しつつも、その日は彼女にプロポーズをしなければならぬ日だと思いつく。何とか彼女に連絡を取ろうとするが、体はうまく使えないし言葉もしゃべれない。

ある日僕は目が覚めるとキリンになっていた。いきなり首が長くなつたものだから、勝手悪い事この上ない。初めは起き上がる事すら困難だった。

それに、自分がキリンになるまでは思いもしなかった事だけど、キリンの手足には意外なパワーがある。起き上がる時に慣れない体でバタバタしたせいで、スタンドミラーが激しく破壊され、木製の椅子は真つ二つに叩き折られた。まさに野生のパワーだ。

何とか体に慣れてきて多少は動きやすくなったと思つた時、僕は猛烈に焦り始めた。彼女との約束の時間が迫っているのだ。

僕はこの日、彼女にプロポーズするつもりで、かなり綿密なデートプランを立てて準備していたのだ。それがこの有り様である。

迂闊に外に出たら、きつと騒動が起きるに違いない。都心の住宅街に突然キリンが出現したら、それはもう異常事態だ。きつとマスクミに追いかけられ、動物保護団体なんかが出て来て、麻酔銃で打たれて捕獲され、残りの人生を動物園で過ごす羽目になるのだ。そんなの冗談じゃない。

しかし、彼女をほつたらかす事は出来ない。僕は彼女に

「大事な話があるから」

と言って呼び出したのだし、彼女だって、それとなく察してくれていると思う。僕は、僕が「大事な話がある」と言つた時の彼女の反応を思い出した。あの、ある種の期待感に満ちた表情は、僕の隠れた決意に対する声無き理解、暗黙の了解だったに違いないのだ。

何とか彼女に連絡を取ろうと、僕は携帯を探した。リダイヤルを呼び出して通話のボタンを押すだけだ。でもまた力加減を間違つて破壊して仕舞わないように、細心の注意を払わなければならない。僕

は一つボタンを押すことを、こんなに恐いと思った事は無かった。押す前に何度かためらってやり直し、数回ボタンを間違えた。人間の指が欲しい。

何度めかの失敗の後、ようやく電話が繋がった。

「もしもし、萩原ですけど」

彼女の声に、僕は思わず泣き出しそうになるのをこらえた。訳の分からない状況に、不安や焦りや恐怖が積もっていたのだろう。親友の風間や、田舎の母や、諍いの絶えない父の声ですら、同じだったかもしれない。

「もしもし？祐樹？」

サキ、僕だよ。大変な事になったんだ。信じてもらえないかもしれないけれど、僕はキリンに、いや違う。ちょっと急な予定で…

僕はそこまで話そうとして、自分の言葉がまるで人間のものではない事に気付いた。

「何？どうしたの？」

サキが呼んでいる。

ああ…どうすればいいのだろう。

サキ、サキ…

何度名前を呼んでも、僕の言葉は彼女には伝わらない。具も桃も、と言う牛の鳴き声のようにしかならない。この電話の向こうに彼女がいるのだ、と手を伸ばした拍子に、勢い余って踏み潰し、携帯は粉々に砕けてしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0651d/>

キリンの憂鬱

2010年10月25日02時37分発行